

## 大学生の目の輝き

総務理事 中沢正隆



最近の学生は「どうも食いつきが悪い」とか「やる気が今一つ」とよくいわれる。しかし、新入生を教える機会のある同僚は、1年生は皆目が輝いていてやる気があり、質問や意見もあって、結構良いのだという。ではどうして3~4年生になると、皆一様におとなしくなり、目の輝きが少なくなってしまうのだろうか。私は、大学入学後に講義期間が長すぎて、やがて講義が高校の延長に思えてくるのではないかと、聞くだけの座学では少しづつ意欲が薄れていくのではないかと考えている。教員は授業をできるだけ興味深く教えるよう工夫しているが、それだけでは済まされない問題があるように思う。

今の時代はインターネットなどによりグローバルな情報流通が進展し、世の中の動きが速い。大学も法人化され、時代のうねりの中で変化を求められている。当然、学生もそれにさらされているわけである。学生といってもほぼ成人であり、自分の意志もあり、親から離れ、社会への関心も強い。目の輝きを失うのは、大人になりつつある学生の心が活性化されずに世の中の動きについていけないからではないだろうか。鉄は熱いうちに打て。すなわち、学生を育てるための“人造り”の産学連携あるいは社会連携が必要なのである。1~2年生のうちから、講義に関係する大学内での横のつながりや企業の研究所との連携を強くしたり、あるいはインターンを早めに開始したりして、世の中のダイナミックな動きを肌で感じる機会を大幅に増やす必要があろう。また、大学院生が就職に際して、自分をうまく表現できなかつたりするのも、講義を受けるだけで学生間のつながりも薄く、コミュニケーション能力が育っていないからである。社会と接触することにより自分が社会から期待されていることや、世界中の経済や科学技術の動向を肌で感じさせる必要があろう。

このためにも学会は大学と企業の「糊」となって両者を密接に結び付け、様々な催し物を通じて大学生の低学年にも社会の流れを積極的に働きかけるべきである。企業にしても、社員教育として入社後多くの時間を割くことを覚悟しなくても、学生を大学と連携して教育していくことは大きなメリットがあると思う。日本のICT産業は世界のトップレベルであり、それを支えている電子情報通信学会は、この問題に真剣に取り組んでいく必要があると感じている。

その一方で、学生時代は余り負荷をかけず、自主性に任せて好きにさせておいたらいいという意見もあろう。いずれにしてもやがて働かなければならないのだからと。しかし、オープンイノベーションを標ぼうし、大学での研究を企業が利用するようになってくると、学生のあり方も変わらざるを得ないようになってくる。大学が法人化され、大学の経営者も教員も大きく変わりつつある。しかし、重要なところは、日本が生き残るためには学生の教育を時代に合わせてどのように変化させていくかであろう。カリキュラムも今の時代に即して、その講義がどのように科学技術に利用されているのか、予算を措置して実地見聞で臨機応変に教えることが重要である。

少子化が叫ばれる昨今、日本が科学技術立国として世界を相手に生きていくためには、社会が丸丸となって、大学生の育て方をもっともっと工夫する時代がやってきているのではないだろうか。